

郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUJIBAKU

2013.10 NO.78

トピックス

- ・夏休み体験教室の開催
- ・博物館実習の受け入れ
- ・収蔵資料の関連教材を貸し出します
- ・陶棺復元プロジェクト
- ・1階展示室をリニューアルしました

研究ノート

焼失した国元日記

杉井万里子

お知らせ

- ・特別展のご案内



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

(表紙写真 寺山古墳出土陶棺)

プログラム

今年の夏の学習プログラムは弥生土器づくりに代わり美作国建国1300年を記念してミニチュア陶棺づくりに22名が挑戦しました。その他カルメ焼きをつくろう・18名、トンボ玉をつくろう・37名、勾玉をつくろう・75名の計152名の参加があり、それぞれが熱心に取り組みました。

◆勾玉をつくろう◆

8/6(火)・8/7(水)



▲説明を聞いて、形を決めます。

河辺小5年 大井菜摘さん

やすりでけずるところがむずかしかった。昔のアクセサリとして使われていたことにおどろいた。とてもいい体験になったと思う。

弥生小3年 澤田果歩さん

たのしかったです。むずかしかったけど、がんばったら、できたよ。ぴかぴかになって、つるつるにもなって、うれしかったよ。
こながでて、小さくなっていて、きれいなかたちになったよ。

保護者

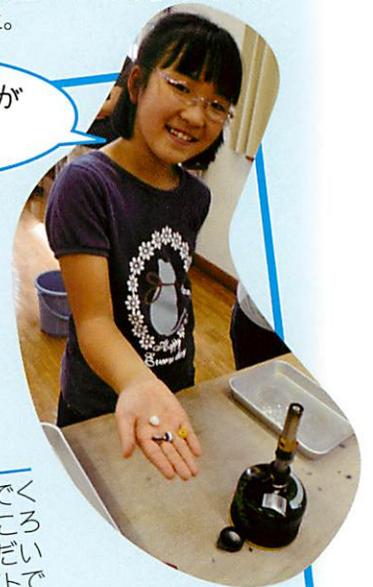
子供と一緒に楽しくできました。いい思い出として、大切にしたいと思います。ありがとうございました。また、ぜひ、こういった会をひらいてください。



弥生小6年 近藤朔矢くん

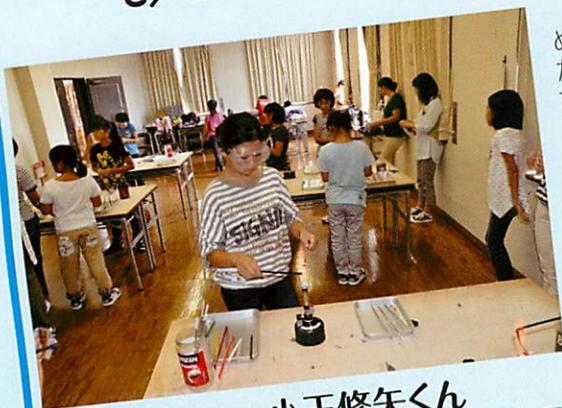
曲げるところをペーパーでやるのがむずかしかったけど、たのしかったし、つやがでて、いいができて、うれしかったです。
たいすいペーパーでこすっていくとき、つやがでてきて、うれしかった。

きれいなトンボ玉ができました。



◆トンボ玉をつくろう◆

8/20(火)・8/21(水)



佐良山小5年 小玉修矢くん

今日、トンボ玉を作ってみて、大変おもしろかった。昔の人も同じようなトンボ玉を作っていたことにおどろいた。来年もこのような体験教室があれば参加したい。

加茂小5年 坂手咲文さん

初めてだったけど、楽しくできた。一つめるときに、きれいにできるかドキドキしたけど、形がきれいになって、うれしかった。もようもきれいにできたから、おもしろかった。また作ってみたいです。

弥生小6年 田中舜也くん

トンボ玉はきれいだし、いろいろ自分でくふうしたり、いろもじぶんできくふうするところがむずかしかったし、トンボ玉は古墳じだいにもあったことがわかりました。エジプトでもつくられていたのがすごいです。

鶴山小6年 木梨嘉紀くん

今回、トンボ玉をつくろうに参加してみて、最初は簡単そうにみえましたが、実際にすると、むずかしかったです。2回も失敗してしまい、結局、2個しか作れませんでした。とても楽しかったです。また機会があれば、トンボ玉を作りたいなと思いました。

◆カルメ焼きをつくろう◆

7/23(火)

夏の学習



①砂糖水を125℃まで温めます。



②重曹卵を入れ、一気にかきまぜます。



③できあがって、お玉からはずすところ。

高田小4年 仁木希実さん

おかし作りが好きなので、とても楽しみにしていた。カルメ焼きのような「南ばんがし」の歴史も分かったし、おいしいカルメ焼きができて、うれしかった。

カルメ焼きはとても甘くておいしかった。また、さんかして、作りたいです。

河辺小6年 大井彩加さん

カルメ焼きは、作ったことがなかったので、楽しかったです。材料や道具がそろっていたら、また作ってみたいです。

◆陶棺をつくろう◆

7/24(水)・8/13(火)



北小6年 奥野恭平くん

まず、とうかんの説明をしました。ぼくは、はく力があるなっと思いながら、とうかんを見ていました。

さっそく実際にとうかんを作るときに、始めはねんどだった。まずは、ねんどを長細くし、とうかんの形を作りはじめた。だんだんとうかんにちかづく、うれしく、わくわくしました。形ができたころ、とうかんを上下にきり、次はかざりにはいった。こまかく形をつくるので、こまかいちょうせいがむずかしかった。とうかんの台にもなる足がじゅうようだなと思った。とうかんができたころ、次は焼く時だ。焼きはじめたころ、外はむしあつく、汗がだくだくだった。

でも、できた作品はどくとくで、なんかやった感がすごくおおきかった。



鶴山小6年 河野晃也くん

とうかん作りがおもしろかった。とうかんの中には死んだ人をはかに入れる前にとうかんの中に人を入れるっていうことがわかった。

実さいに作ったら、だいぶむずかしかった。昔の人は自分が今作ったのよりも10倍ぐらいなのを作っていたから、だいぶ時間がかかったと思います。

火おこしは今ならマッチやライターがあるけど、昔はそれがない。火おこしをするには、火おこし器で火をおこしていたんだな~と思ったら、大へんだなと思った。



加茂小5年 杉山 凜さん

わたしはこの陶棺を作るということがなかったら、陶棺のことは知らなかったと思います。陶棺はどういう物か、どこから出てきたか、などの色々なことが分かってよかったです。

7月24日に作った時、すごくむずかしかったけど、がんばって作った。8月13日はいよいよ野焼き。7月24日に作った時に、ちょっとひびが入っていたから、われるかもって思ったけど、われていなかった。よかったと思う。これですごい自由けんきゅうが出きると思います。みんなによるこぼれるような自由けんきゅうにしたいです。また、やってみたいです。



▲火おこしの苦勞も体験。



博物館実習生を受け入れました。



平成25年8月6日から8月13日まで、博物館実習生2人を受け入れました。博物館実習は、学芸員資格取得のために必要な科目の一つです。

今年度は、夏休みの子供向け講座、写真撮影や資料整理など、様々な業務を実習しました。資料整理では、目録作成の準備段階として、膨大な量の資料1点1点にラベルを貼付していく作業を行いました。夏休みの子供向け講座では、受付から作業の説明まで実習生にお任せしたほか、炎天下でのミニ陶棺の野焼きも手伝っていただきました。



当館では学校の授業などで使っていただける教材の貸し出しを行っています。貸し出しを行っているものは



▲拾万石御加増後初御入国御供立之図(大名行列図)の垂れ幕(幅約90cm、長さ約13m)



▲拾万石御加増後初御入国御供立之図(大名行列図)のパネル



▲津山城CG復元パネル

の3点です。お気軽にお問い合わせください。

学習教材の貸し出しを行っています。

また、引き続き、実物の火縄銃など博物館資料に実際に触ってもらったり、勾玉づくりやとんぼ玉づくりなどの体験学習も行っています。資料によっては学校に出向いての授業も可能ですので、こちらもお気軽にご相談ください。

陶棺復元プロジェクト進行中!



▲猛暑の最中の成形作業



▲成形作業の完了した陶棺

美作国建国1300年を記念して勝北陶芸の里では、水原古墳から出土した亀甲形陶棺を実寸大で復元する事業が進められています。備前焼作家の花岡勉さんをはじめとする有志の方々が、7月から粘土を用いて製作を開始しました。猛暑の中、2か月にわたる根気強い作業の末に成形作業が終了し、9月20日現在で乾燥させながら窯の用意が行われていますが、素晴らしい出来ばえで、完成が楽しみです。台風18号通過の影響で少し作業が遅れてはいるものの、10月上旬ごろには焼き上がるということで、完成した陶棺は10月27日の陶棺シンポジウムの会場でお披露目され、その後は当館で特別展の会期中に展示する予定です。

博物館1階の一部をリニューアルしました。



津山郷土博物館1階の一部をリニューアルしました。展示室に入ってすぐにあった地理模型を撤去し、壁には正保の美作国絵図のパネルを展示して、初めて津山を訪れる方にも美作地域全体をイメージしてもらいやすくしました。また、津山郷土博物館のキャラクターもいて、子供にも愛される博物館をめざしています。



焼失した国元日記

杉井万里子

はじめに

津山藩松平家文書は現在岡山県の重要文化財に指定されています。その大半をしめるのが日記類です。津山藩の各役所における日々の仕事内容を記したもので、国元日記・江戸日記・町奉行日記・郡代日記など多くの種類があります。

今回取り上げる国元日記とは、津山での重要な出来事が記されており、表紙に「日記」「津山日記」「作州日記」とあるものを指し、表紙に「国元日記」と書かれた日記は目録上ではありません。他の日記とわかりやすく区分するために国元日記という言葉を使っているのです。これらのことや、国元日記の内容などについては『愛山文庫目録 津山松平藩文書の部』津山学ことはじめ』などで、すでに述べられていますので、この研究ノートでは、国元日記の奥書に着目したいと思います。

奥書の記述

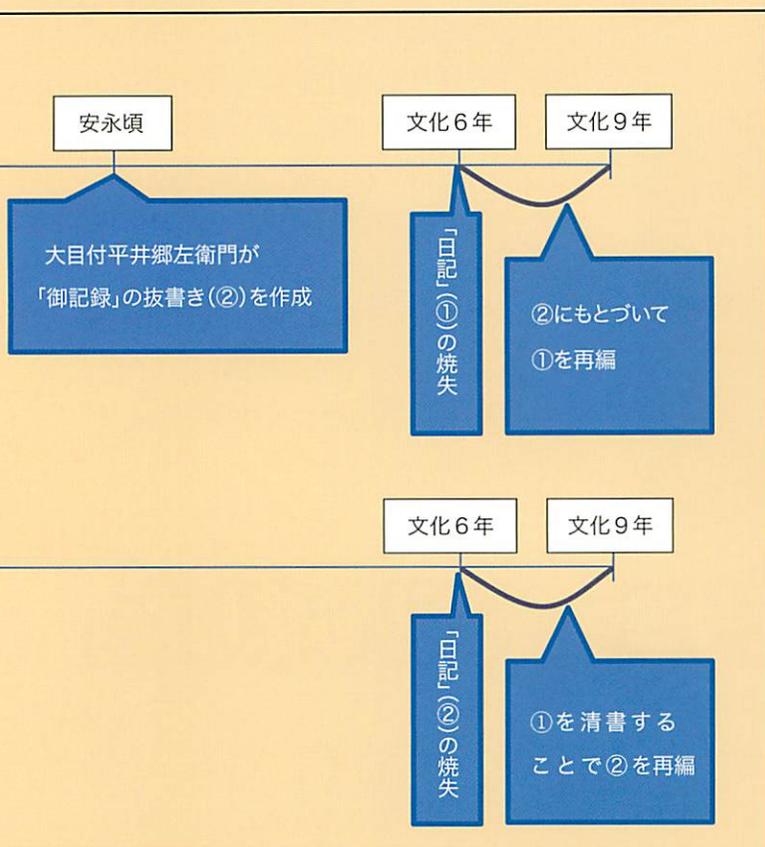
奥書とは、書写本などの末尾の、年月、筆者名や由来などについての

書き入れをいう言葉ですが、巻末にあるもののみではなく、巻首にあるものも含まれます。表紙に「日記」と書かれている文化六（一八〇九）年以前の国元日記（以降「日記」とのみ表記）のうち、約六十冊の巻首や巻末には、要約すると、文化六年の火災により焼失したが、調べて記した旨の奥書があるのです。文化六年

の津山城本丸火災で、それまでの多くの「日記」は焼失してしまいましたが、その後、再編されたと考えられます。

まず、例として宝永三（一七〇六）年の二冊の「日記」の奥書を読みます。宝永三年の「日記」は一月〜四月と五月〜十二月に分冊されています。

① 一月〜四月分
「文化六年御記録之内焼失ニ付宝永三戌年正月ヨリ四月迄之分以平井郷左衛門大目付役中御記録抜書一記レ之



大目付黒田頼母
一月から四月分については、平井郷左衛門という人物が大目付という役職についていたときの「御記録抜書」をもとに、一旦焼失してしまつた「日記」を再編したということが書かれています。ここで「御記録」という言葉が出てきますが、これは「日記」を含む言葉と考えられます。

平井郷左衛門という名前の人物は、宝永六年に五郎左衛門から郷左衛門と改名した人物と、安永頃に活躍する人物がいますが、大目付という役職についていたのは後者の方で、安永三（一七七四）年八月一日に大目付になっています。これらのことを図に示すと上図①のようになると考えられます。

② 五月〜十二月分
「文化六年御記録之内焼失ニ付調被ニ仰付一候処右宝永三年五月方十二月迄之分下日記大戸櫓ニ納有レ之依而猶又清書取ニ計之」文化九年孟春
五月から十二月分については大戸櫓に納めてあった「下日記」を清書することで再編したということが書かれています。「下日記」は「日記」の下書きのようなものと考えられます。（上図②）

次に安永三年の奥書を例にあげます。

③「文化六年御記録之内焼失」付安永三年分以御政治奉行永井甚太夫大目付平井郷左衛門役中扣書「記」之

大目付黒田頼母

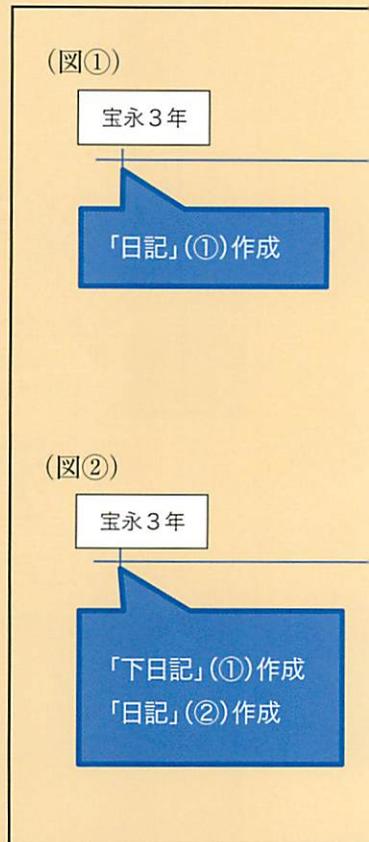
安永三年分については、その当時、政治奉行と大目付であった永井と平井の仕事の控えをもとに再編したということが書かれています。

以上①②③の例より「御記録抜書」「下日記」「役中扣書」にもとづいて「日記」が再編されていることがわかります。その他の年の奥書を読むことで、前記とあわせて「諸役所之記録」なども組み合わせて再編作業が行われていることがわかります。

再編の過程

さて、奥書から、「日記」が何にもとづいて再編されたのかを考えました。では、再編作業はどのように進められたのでしょうか。その過程については詳細な記述がなく、わかりにくい部分が多いのですが、「日記」本文に書かれていることをおおまかにまとめてみます。

まず、火災発生から約一か月後の文化六年二月十五日、大目付黒田頼母に、焼失してしまった「御記録」



と「御奏者方大目付役所書類」の「取調」が命じられます。同年十二月二十三日、文化八年十二月十八日には「御記録写」を行っていた右筆など四〜五人に褒美が与えられています。文化九年五月二十六日には、普段の仕事に加えて「御記録取調骨折」だったということで、黒田頼母の格式が上がっています。

黒田頼母が中心となって、文化六年〜九年にかけて再編作業が行われたことは、「日記」の奥書に、「文化九年孟春」「大目付黒田頼母」と書かれている年があることと一致しています。

また、文化九年六月一日には、「御記録取調」にあたって書類を差し出したとして、代々家老や年寄、大目付などの要職に就いている四人に、お喜びの御意が黒田頼母より伝えられています。

江戸からの送付

実は、焼失してしまった「日記」の穴埋めは、今まで考えてきたよう

な「下日記」や藩士達の「御記録抜書」・「役中扣書」などからの再編作業のみで行われたわけではありませんでした。詳しくは『津山学ことはじめ』を参照していただきたいのですが、江戸藩邸にも津山での重要事項を記した「日記」の写し（これが表紙に「津山日記」とあるもの）が保管されており、それらを津山へ送っていたのです。津山藩の江戸屋敷での重要事項が記されている「江戸日記」の文化六年四月二十八日には、津山からの要請により、「比表有之」津山日記写天明五年巳年方寛政三年亥年迄都合九冊」を津山へ送ったという記事があります。

国元日記が欠けている期間

このように江戸から「津山日記」を送ったり、津山にあるものから再編したりして、焼失してしまった「日記」の穴埋めを行ったと考えられるのですが、明和九（一七七二）年八月〜十二月の期間だけ、「日記」も「津山日記」も目録上ありません。

この明和九年八月という時期は、藩政改革により津山での人事が大きく変動した時期と重なります。明和九年八月一日に新人事が発表されるのですが、ちょうどその八月一日の記事から始まり、同年の十二月で終わる「御政治奉行日記」と「大目附所日記」がのこされています。

その翌年である安永二年の「日記」の奥書は（前略）安永二巳年以御政事奉行永井甚太夫役中扣書并大目付平井郷左衛門御記録抜書「記」之（後略）」とあり、安永三年の奥書は、③であげた通りで、宝永二年と三年の「日記」は、御政事奉行と大目付の「役中扣書」や「御記録抜書」にもとづいて「日記」が再編されているのです。このことから、明和九年の八月〜十二月の期間は、「日記」や「津山日記」は欠けているものの、「御政治奉行日記」や「大目附所日記」により、ある程度、津山での重要事項を窺い知ることができるのですが、この二冊については今後分析が必要です。

以上、焼失した国元日記について考えられることをおおまかにまとめました。今後引き続き調べていく必要がある興味深い課題です。

ひつぎ

みま さか

とう かん

特別展 『土の棺に眠る～美作の陶棺～』 開催中です



【会 期】平成25年10月19日(土)～12月1日(日)

【休館日】10月21日(月)・28日(月)
11月5日(火)・6日(水)・11日(月)・18日(月)・25日(月)・26日(火)

【会 場】当館3階展示室

美作国は、和銅六年(七一三)に備前国から分国し、二〇三年は建国三三〇〇年に当たります。これを記念して当館では、今年度の特別展として「土の棺に眠る」美作の陶棺を、美作国で数多く用いられた陶棺に焦点を当てます。

陶棺は、土でできた焼き物の棺で、主に六世紀末から七世紀代の後期古墳に多くみられます。全国で陶棺は約七五〇例出土していますが、そのうち岡山県での出土は約七十五%にのぼります。また、県内での出土は美作が約七割をしめており、陶棺はまさに美作を特徴づける遺物の代表といえるでしょう。

陶棺がいつごろから作られたか？また、どのような人のために製作されたのか？本展では、様々な謎を秘めた陶棺を、美作各地の出土品を中心に展示し、陶棺が製作された時代背景や、その被葬者像に迫ります。

関連事業

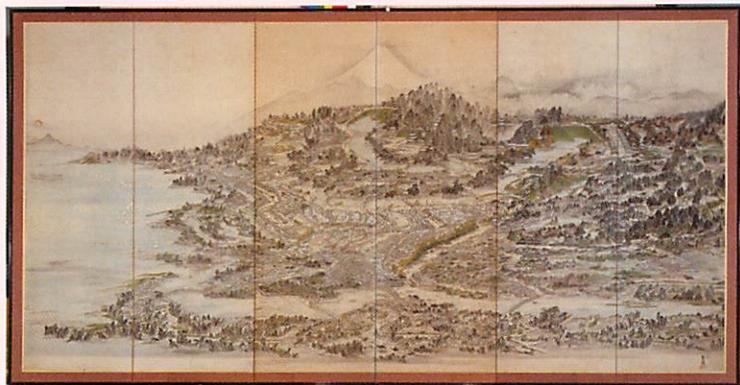
- ①美作国建国1300年記念「陶棺復元プロジェクト」津山市新野山形水原古墳出土の陶棺を原寸大で復元します。
②シンポジウム「陶棺の謎に迫る」【日 時】平成25年10月27日(日)13:30～【場 所】勝北文化センター

※①で復元された陶棺は②の会場で当日展示し、その後は特別展が終了するまで当館で展示します。

江戸一目図屏風の公開予定

実物の江戸一目図屏風の次回の公開は、平成26年4月5日～5月6日

の予定です。



本資料は県指定文化財であるため、年間の公開期間が二か月以内に制限されています。

今年度は、当館での公開と貸し出しによって、すでに公開期間が二か月に到達しております。

当館では、実寸大で実物と遜色のない複製屏風を常設展示していますので、何とぞご了承ください。

大 博物館だより「つはく」
No.78 平成25年10月1日

津博
TSUJIKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail: t-kyoudo@tsu-haku.jp

【印 刷】株式会社 廣陽本社

入館のご案内

- 【開館時間】午前9:00～午後5:00
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日
年末年始(12月27日～1月4日)・その他
【入館料】一般 200円(30人以上の団体の場合160円)
高校・大学生 150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。